

2113再構築9

自由と生きがい

エリー

本文

少年漫画に出てくるような、「誰もいない島で一年生き延びてみろ」という修行は、実行できる人が少ない。

しかし、自由とは本来そういう厳しさのあるもの。

すべてが監視下に置かれている今、自由に活動できる広大な自然は残されていない。
必ず所有者がいて、勝手に入ることは許されない。

もし、自然を利用して、狩猟と採取で生きられる自由が残されていたなら？

それは、現代人にとって「希望」になるのではないか。

狩猟と採取で生きる知恵は、学校の勉強とは違う。

生活する中で時間をかけて身につけるもの。

高度な知識と技術を身について、高収入を得るために、狩猟と採取の知恵より、学校に通う方がいい。

しかし、「分業」を受け入れるほど、組織の拘束を受けることになる。自由ではなくなる。

「降りたい」と思っても、「行く場所＝自然」と「生きる知恵」がなければ、機械文明の中で生活する以外ない。

国という組織の一部として機能するためには、「完全なる自由」を認めることはできない。

なんらかの形で「役立つこと」が求められる。

敵もいないし、少年漫画みたいに、「自己鍛錬のために山に籠る」では、他人が支える理由がない。

原生林が侵入者に荒らされないように見回ると同時に、狩猟と採取で生きる知恵を伝える役割が、「山男」という存在。

誰でもなれるわけではないから、保護区という聖なる存在の中でも、神聖な存在。

普通の人は、開発された保護区の居住区から出ない。

林業を基幹産業とする場合も、計画的に道路を作り、重機を入れて作業するので、原生林ではない。

山男は、山奥の保護区に所属し、手つかずの原生林を歩き回って、たまに保護区の居住区に装備や食料を補給しに戻ってくる。

組織の一員で、縛りがあることは変わらないけれど、都市と違って、自然がものごとを決めていく。

どんなに屈強な人間でも、山を切り開くために重機でやってこられたら、対抗できないだろう。

◦

しかし、どんどん自然を開発しても、市場は限られているのだから、頭打ちになる。

開発するより、メンテナンスする方が大変なのだから、「開発するのはここ！」と決めて狭い範囲で動く方が効率がいい。

意図的に開発せず、「自然の中で生きる権利」を確保することで、機械文明と自然文明のバランスをとる。

都市機能は集中しているからこそ生かせる。

田舎を都会と同じように開発し、維持していくことは不可能。

それならば、「開発しないで生きられる環境」を作ればいい。

保護区の居住区までは道を作り、「物流」が機能するようにする。

林業や農業などの基幹産業のための地域も、重機が入れるようにする。

しかし、そこから奥は、開発しない。「徒歩」を基本とする。

勝手には入れない、神聖な場所として守る。

開発が進められてきたからこそ、開発しないことが財産になる。

少しの人数で、大量に生産できるようになったことで、生きるために欠かせないこと以外をする余裕ができた。

たとえば、観光。

別にしなくとも全く困らない。しない人もいるし、できない人もいる。

しかし、「お金を儲ける」という意味では、利用者が必要なので、やらなければならない。

そこには矛盾が生まれる。

「生きるために必要とすること」を自分でしなくとも、他人が提供してくれる。
しかし、手に入れるためには、お金が必要だ。
お金を得るためには、何かをしなければならない。

何をするのか？

「あつたら楽しいが、なくても困らないこと＝確実な需要が見込めない不安定な仕事」をすることになる。

お客様は、この地域に魅力を感じてくるかもしれないし、こないかもしれない。
分からぬ。

自給自足のために働いていたころは、その労働は絶対に必要だった。
収穫が得られなければ、飢えるかもしれない。
しかし、「作ったが食べる人がいない」という問題は起こらない。
豊作でも新米は貯蓄して、古米を食べるのが普通だったから、いざというときの「備え」となり、無駄になることはなかった。

ところが、「他人に提供する＝売る」となると、「選ばれないかもしれない＝労働が無駄になる」が起きる。

自給自足している場合、望まないことは最初からしないので、労働が無駄になることはない。
働くほど豊かになる。

しかし、売り買いしている場合、選ばれなければ無駄になる。

当たれば大きい映画も、見たいと思う人がいなければ、無駄になってしまう。
その映画がどんなにおもしろくても、「娯楽にお金を使うのは無駄だからやめよう」と多くの人が思うようになったらすたれてしまう。
なぜなら、娯楽と呼べるもののがなかった時代とは違い、ネットさえつながれば、無料の娯楽が転がっているから。

大都市で、いろいろな国や地域の料理が食べられるなら、わざわざ不便な思いをしていかなくともいいという人も出てくる。

ところが、便利にしたら、旅をしている実感がわからない。
どうすればよいのか。

確実な需要があるわけではないのに、「突き抜けた存在」になるまで努力しなければ売れない現実は、生産力が上がったから起きた問題。

「普通に働く」ができない。

「異常に高度」が求められる。

すると、必要なものを生産する力はあるのに、購入する力のない人が増えていく。

購入する力のない人が増えれば増えるほど、「必要不可欠なもの」以外は売れなくなって、さらに購入できなくなる人が増えていく。

経済を回すために、いらないものを買わせたり、遊びたくないのに遊ぶことを求められたりしたら、生産力を上げたことが全く生かされない。

かえって不自由になってしまう。

だからといって、「計画的に生産して、計画的に使う」では、人の心は行き詰ってしまう。

新しいこと、珍しいものが求められる。

だから、「計画的に生産したものを使い、確実な需要を生み出す存在=保護区」と「自由選択を許し、新しいものを提供する存在=自由区」にわけた。

二つは、ネット上でつながっているし、物流でもつながっている。

保護区に持ち込めるものには制限があるが、7歳になると一人1台端末が与えられるので、ネットを利用することができる。

しかし、子どもの端末にはアクセス制限がかかっている。

13歳から15歳の間、寮生活をしながら、工場で働き、勉強して、卒寮したら、端末の制限が解除される。

保護区で暮らす16歳以上の大人は、毎月お小遣いが電子マネーとして与えられるので、それを使って欲しいものを買うことができる。

保護区に持ち込めるものをネットで注文して手に入れることもできるし、ネット上のサービスを買うこともできる。無料配信動画だけでなく、有料配信動画を買うこともできる。

保護区でとれたものを自由区に送ったり、自由区で手に入れたものを保護区に送ったり、物理的な交流もできる。

つまり、保護区で生きる人は、自由区の「ネット上の商品」や「現実の商品」を買ってくれる人もある。

自由区でお金を儲けた人が、保護区を支えるための資金を払って、自分たちの町を運営する権利を買う。

集めたお金を元に、保護区で必要なものを、保護区や管理区で生産し、配分する。

保護区を支えるために働いた人には、集めたお金の中からお小遣いが与えられる。

そのお小遣いを使って、自由区の商品を買うことで、間接的に自由区に再配分される。

ややこしいのでもう一度、整理しよう。

自由区で、経済的に成功して、「生活に必要とする以上に儲けた人」がまず存在する。

その人が持つ「余剰分」を、「保護区を維持すること」と「保護区を維持した人への報酬」に使う。

「保護区を維持すること」は、管理区の運営や、自由区からのサポート労働者への給料となる。「計画的に生産し、計画的に使う=確実な供給と需要」として、生産性が高くなつたことを生かす手段とする。

「保護区を維持した人への報酬」は、自由区で提供される珍しいものを買うお金となる。「選択の自由を認め、新風を吹き込む=改革の余地を生み出す」であり、「なにを育てるか?」を選択する手段となる。

結局、経済的に成功して、必要以上を生産している人のところへ、お金が戻るかもしれない。その可能性は高い。

しかし、隙間に滑り込めば、自由区で勝ち上がるチャンスを得られるかもしれない。余剰分を生産していた人のお金が、それまで経済的に成功してなかつた人のところへ流れる。

すると「生産力の高さを生かす」と「選択の自由を許す」が両立した世界になる。

確実な需要が欲しければ保護区を選べばいいし、不安定でも好きなことがしたければ自由区を選べばいい。

卒寮資格があれば、40歳までなら、保護区に戻ることができる。

一度挑戦してから決めるという方法もとれる。

「必要」ではなく、「好き」を選べば、結局、厳しさが伴う。

しかし、「必要が選べない」という問題は解決するだろう。

「好きに生きる自由」を与えられても、「必要なことをして"生きる手段"を見つけること」ができなかつたら意味がない。

もし、自由区に大勝している人がいない場合、全員から一律で天引きされる。

それが、保護区を経て、再び自由区に配分される。

「機械化すれば、人間は自由になれる」というが、それは違うと思う。

機械を生み出すまでの労力が欠かせないし、維持し続ける労力も欠かせない。

「機械が機械を産む」という状態になっても、その機械たちを正常に動かす人が必要だろう。考えることまで機械が行うようになったとしても、「機械なしには生きられない」という状態は自由ではない。

たとえば、何にもない宇宙空間にコロニーを作ったとしよう。

そこでは機械が考え、機械が機械を作り、人間は働かなくてもよいとしよう。

そしたら、何をする？

そのコロニーの中なら自由に動ける。なぜなら、機械の管理が及ぶ範囲だから。

しかし、コロニーの外に出ることはできない。

その状態に疑問を持つことなく生きられるだろうか？

管理するということは、同じことを繰り返すということ。

飽きないように、ある程度「幅」を持たせて、「自由選択の余地」を残すことはできるかもしれない。

しかし、ただ繰り返しているだけだと、退屈するのが人というものではないだろうか。

新しいものを定期的に投入してくれるプログラムも機械が考えてくれると思う。

なんでも与えてくれるとしよう。

そしたら、満足するだろうか？

わたしはしないと思う。

自分で生み出したい欲求を感じるだろう。

他人から与えられた刺激で満たそうとしたら、生きている時間は長すぎて、飽きてしまう。

自分が何かをしたいと思うようになるだろう。

言えば何でもやってくれる親がいたとする。

自分の知らないことを知っていて、刺激も与えてくれる。

何でも考えてくれる。

それはそれで幸福かもしれない。

しかし、ある日、気づく。

親ができる範囲から外に出ることはできない。

安全なところにとどまって暮らしたいなら、それでもいいかもしれない。

でも、親は必ず死ぬから、その時、自分がどうなるのか考えないわけにはいかないだろう。

自分で自分を作りだし、考える機械は、親と違って死なない。

けれど、その機械なしでは生きられないことは変わらない。

「依存しないで生きたい」という欲求を感じるようになるだろう。

その「できるだけ何物にも依存しないで生きたい」という欲求を満たしてくれるのは、採取と狩猟で自然の一部として生きる手段が土台にあるのではないだろうか。

サバイバルまでいかなくとも、機械文明の中で、機械の扱い方を知っていて、自分の行動を選ぶことができたら、それなりに満足するのではないだろうか。

わたしは、もともと丈夫ではなかったけれど、出産を契機に一気に悪くなった。

それでも母親役や妻役を務めたくて、必死で頑張ったけど、どうにもならなくて親に助けを求めるしかなくなった。

助けてもらえたかったら、回復できずに死んでいたかもしれない。

しかし、助けてもらえて、役目を果たす必要がなくなったら、自由な時間ができてしまう。

その時間をどう埋めるのか？

助けてくれたのが親だから、「好きなことしていいよ」と言ってくれた。

別に、遊んでいても怒らない。

最初はもうしわけないと思って、体が丈夫になりそうなことなら、何でも挑戦した。

大嫌いな運動にも挑んだ。

同時に、動けなくなる恐怖から、動き回った。

行きたいところに行って、したいことをした。

海にも潜った。

そんな自由のない人がほとんどだから、自由を与えられたらどんな感じか分からんだろう。

このまま死ぬかもしれないと思うから、刺激に夢中になれる。

思ったより長生きしそうだぞとなったら、刺激は刺激ではなくなる。

「いつでもできること」に変わってしまう。

「今やらずに、いつやるのだ！」という気迫がなくなる。

お金がなかつたころは、お金さえあつたらいろいろできるのにと思っていた。

少し自由に使えるお金が増えて、お金があつてもどうにもならないことが多いことを思い知る。

「自分ができること」をこえて何かをすることは、お金があつてもできない。

「スキューバーダイビングがしたい」と思っている時は、どこでも構わないので、出来そうなところを選んで世話をもらうことができる。

装備を用意してもらって、船で運んでもらって、時間の許す限り潜ることができる。

しかし、一人で潜れるように免許をとろうとか、流れが急な場所にある海底神殿が見たいとか、技術を身につけることが求められると、お金を払っても解決しない。

自分の能力に縛られる。

「自分の能力に縛られる」は、程度の差はあれ、誰にでも起きる。

続けていれば上達することなら、努力次第で新たな世界を見られるかもしれない。

しかし、繰り返してもよくならない領域は、諦めるしかない。

虚弱体質は治せない。

運動しても体が丈夫になることはない。

ついた筋力を維持できなくて、寝込む日が増えるだけだった。

そういう問題は、頭でも、心でも起こるだろう。

考えれば考えるほど混乱する。

冷静になろうと思うほど感情的になる。

そんな感じのことが起きる。

変えられないことは、事実を受け入れることが求められる。

体の場合は、結果が出るから分かりやすい。

わたしの場合は、下痢が止まらなくなる。

「トイレに行つたら液体状の便が出た」というだけなら他人には分からぬから理解してもらえないかもしれない。

話しても、「そんなことは誰にでもあることだよ」と言われてしまうかもしれない。

しかし、「体の向きを変えただけで、勝手に便が流れ出ててしまう」は隠しようがないので

、自分も他人も理解しやすい。

「普通じゃないよね」と思う。

安静にしないと、脱水症状に陥り、高熱が出る。

はっきり結果が出るから、寝ていても、誰も文句を言わない。

でも、「考えていること」や「感じていること」は見えないから、「確かにそうだ」と確認することが難しい。

自分でも気づきにくいし、他人を説得することは難しいだろう。

「動き過ぎたらだめなんだ」「考えられないんだ」は、「代わりにする」が可能。

しかし、「感情を抑えられない」は、どうしようもない。

そう考えたら、心が弱いのが一番つらいのではないか。

たとえば、お金もあって、能力もあるのに、何にも興味を持てない場合、他人にはどうするともできないだろう。

そう考えたら、ポンコツでもやりたいことがあって、やれる環境があるなら、それは幸福なのではないか。

弱いくせに、無駄にやる気だけはあるので、「何にも興味が持てない」という感覚に実感を持ったことはない。

だから「楽しくない」と言っている人に、「わたしは楽しいし、楽しくなくなることはできないけど、大人になったら楽しくなくなった方がいいの？ それをするといいことあるの？」という疑問の持ち方をして、虚無がなんなのかすごい興味津々だった。

探し求めて、やっと見つけたから、「虚無って、この人みたいなことを言うんだろうな」となった時、間接的に本人に言ってしまったことを今でもすごく後悔している。

どうやら本人は怒ってないみたいだけど、なんてアホだったんだろうと思う。

「このまま死ぬかもしれない！」となった時、人のために役立つことをしようとか、重厚なことは考えなかった。

「食べたいものを食べる！」みたいな刹那的な快楽を求めた。

それまで、「今も、未来も通用するものを求める」という理想のためにすべてを犠牲にしてきたので、あらゆることが面白くて仕方がなかった。あれも、これもと、あとで排泄障害が起きて困っても挑戦した。

「一生のうち、一週間寝込むだけでいいなら、やらないと損！」と思えたのは、「次はない」という切迫した状態だったからできたこと。悪化して、寝込んだままになる恐怖と戦っていたから、「今以上によくなることはないのだから、今やらなくて」と思えた。

「休養をとれば小康状態を保てるので、次はあるし、当分死ななさそう」となつたら、「わたしがいてもいなくても変わらない、役割のなさ」が胸に迫る。

人の役に立ちたいと思うようになって、占いを仕事にしようと覚悟を決めた。

だから、機械が全部やってくれて、働くなくてもいい状態になつても、人はなにかをせずにはいられないだろうと思う。

なぜなら、「いつか死ぬ」という現実に対して、「どう生きたか」が答えになるから。

その辺は、

「死を見つめる心」（岸本英夫、講談社文庫、460E、1973/03/15初版、2016/04/01第42刷）を読んで、より確信を持った。

やっとわたしのボナ先生を見つけた！

「やりたいことをやって、いい人生だったな」と思えるかどうかで、死の恐怖を克服できるなら、「刺激を求めて、娯楽で時間を埋める」をしても、「お金さえ払えばだれでも与えられる領域」からでないままなら、飽きて、退屈して、「十分生きた」と思えないだろう。

人によっては、山に登るとか、不可能に挑戦することが生きがいになるかもしれない。

しかし、多くの人にとっては、「他人の役に立った=有意義なことをした」に落ち着くのではないか。

わたし自身は、弱くて、どうでもいいことに動搖して、小さなことを拡大するような狭い世界に生きている。壮大さがない。

知恵どころか、悪知恵も働かない、単純な性格。

そんなわたしが、いろんな人がいっぱい出てくる群像劇を書くのは無理がある。

人数を有限に区切り、1対1の関係に絞って、エピソードを積み上げていくことで、欠点をカバーできるかもしれないが、自信はない。

ただ、一度思い立った夢を追うだけ。

それは、あてのない虚しい行為。趣味であって、仕事ではない。

占いは仕事。

ちょっと前まで「有名占い師になって予約殺到」を目指していたけれど、無料鑑定で連続して占つたらぐつたりしてしまい、その夢はかなわないだろうとはっきりした。

しかし、役立てる技術を身につけられた喜びの方が大きい。

お金になる・ならない以前に、「必要とされるときに役立てる人になりたい」と思う。

もっと勉強したいと思った。

主人公ララも、趣味が小説を書くことで、職業が占い師という設定。

保護区では、区長補佐として、村人の相談役になる。

人がどんなことで悩むのかは、ココナラで無料鑑定をするうちに見えてくるかもしれない。

占いの技術を上達させるためにも、本を読むことも大切だけど、人をたくさん占うことも大切だと思う。

小説「ファンレター」は、わたしが成長しないと書けない話。

変化を書くから、成長の過程を記録することが必要なので、メモ書きも登録して残しています

。